

博士論文の要約

氏名： 牧野 由佳

論文題目：梯子獅子の民俗学的研究

—愛知県知多・朝倉の梯子獅子の変容に注目して—

本論文は、日本に伝承される獅子舞の一種である「梯子獅子」（獅子に扮した二人一組の演者が梯子に登り、高所で舞を演じる民俗芸能）を対象として、次の二点の解明を目的とするものである。

第一に、民俗芸能の担い手たちが有する伝承の変容過程の実態と特質を明らかにすることである。特に、その変容が地域内外の社会情勢とどのような関係を持つのかに注目し、伝承組織と組織を構成する個々人との関係性の動態にも焦点を当てることによって、民俗芸能の変容および継承を多面的に分析する。第二に、梯子獅子における舞台装置（梯子・ヤグラ）の信仰的意義を明らかにすることである。折口信夫以来の棧敷論・ヤグラ論を、民俗芸能の実践から再考する。

従来の民俗学では、伝承母体論に代表されるように、伝承の担い手を地域共同体や家族・親族といった集団の枠組みの中で捉える視点が主流であった。しかし、こうした視点に対して近年では、民俗としての伝承に注目するあまり、実在する個々の人間への関心が希薄であったという批判がなされている。

民俗芸能研究においても、多くの研究者によって「個」への注目が深められてきた。しかしながら、その多くは特異な技能や熱意を持つ「キーパーソン」にのみ注目した研究で、民俗芸能に参加するその他大勢の担い手は周縁化・同質化されてきた。本研究では、特定のキーパーソンのみならず、その周囲にいる多様な担い手への聞き取り調査を通じて、伝承の変容と「個」との関係性を論じた。

研究方法は、フィールドワークと歴史資料の検討を主とした。第一の課題については、愛知県知多市朝倉集落に伝承される梯子獅子を事例とし、平成 25(2013)年から令和 7(2025)年までの 10 年以上にわたり現地調査を実施した。本梯子獅子は、朝倉の氏神社である牟山神社において毎年 10 月の例祭において奉納芸能として演じられる獅子舞である。調査においては、担い手組織内の多様な立場・世代約 60 人に対して聞き取り調査と参与観察、牟山神社所蔵の歴史資料調査などを行なった。第二の課題については、日本列島に伝承される梯子獅子の担い手たちの舞台装置に対する認識と扱い方を比較検討することにより分析した。

本論文は、序章・本論十章・終章の構成をとり、序章では、まず、問題の所在について確認した。民俗学・民俗芸能研究における伝承組織と「個」に関する研究を振り返り、従来の研究の課題を確認した。また、本論文で研究対象とした梯子獅子の歴史や、梯子獅子の研究史を概観し、梯子獅子を対象とする意義を論じた。これらを踏まえた本研究における課題を

提示した。以下、各章の議論を要約した。

第一・第二章は、広域的な視点から、従来の研究では明らかにされてこなかった日本列島における梯子獅子の分布状況と各伝承地の地理的特徴、さらに各地域の舞台装置の特質を明らかにした。

第一章では、悉皆調査により、梯子獅子が令和元（2019）年時点で33か所に現存し、過去に伝承されていた地域が少なくとも25か所あることを明らかにした。分布地の地理的特徴として、①東北から九州にまで分布している、②基本的に伝承地が太平洋や紀伊水道・瀬戸内海側にあり、日本海側に認められない、③基本的に沿岸部、あるいは沿岸部の伝承地と隣接した地域に位置する、④伝承地は広範囲に渡り点在しているのではなく、梯子獅子が集中する伝承圏域が複数存在する、という四点を挙げ、伝承地が集中する伝承圏域（三陸沿岸南部エリア、房総エリア、尾張・知多エリア、環淡路島エリア）を措定した。

第二章では、植木行宣の民俗文化分布圏論の方法を援用し、梯子獅子のもっとも重要な舞台装置である梯子の形態に着目し、各地域の特質を考察した。その結果、梯子獅子の梯子の設置形態は四つのタイプに分類でき、近隣地域では同一形態が集中して分布するという地域性が認められることを明らかにした。また、梯子獅子の伝播について、起源伝承や史資料などの検討を通じて考察し、海を通じた交流交易による広域的な伝播の可能性を指摘した。特に、尾張・知多エリアと環淡路島エリア南部との間には、尾州廻船などの海上交易を通じた文化交流があった可能性を近世史料などから推測した。

続く第三章から第八章では、本研究の中心的な調査地として設定した愛知県知多市朝倉集落に伝承される梯子獅子について、その伝承実態を記述するとともに、地域社会とのかかわりの中で梯子獅子がどのような変化をたどり現在に至っているかを、複数の視点を織り交ぜながら検討した。

第三章は、次章以降の議論の前提として、本芸能が伝承される朝倉集落の概況と牟山神社例祭・梯子獅子の伝承組織について詳述した。

第四章では、梯子獅子の担い手である青年組織の変容に焦点を当て、組織の再構成が個々の担い手の実践や認識に与えた影響を検討した。昭和30年代まで、梯子獅子の担い手は朝倉出身の数え16歳から24歳までの男性に限定され、青年団の加入は強制されていた。しかし、昭和40（1965）年の青年団解散を契機に、有志による朝倉青年会が組織されて以降は、参加は個人の選択となった。その後、担い手不足に対応するために、参加条件を近隣地区の住民にも拡大し、幼年部期間を2年から1年に短縮するなど組織再編が行なわれた。

さらに、昭和40年代に発足した朝倉梯子獅子同好会が、指導やサポートだけでなく、演者としても活動するようになり、現在では両組織が多くの場面で実質的に一体となり活動している。表向きは青年会が中心的に担い手とされているが、実態として組織の年齢層は大幅に拡大している。こうした組織変容により、青年会引退後も長期にわたり関与する新たな参加形態が生まれた。また、出身地による位置づけの違いや、個々人の動機づけの多様性も明らかとなった。梯子獅子の担い手の組織構成は変化せず維持されてきたのではなく、社会

情勢に応じて柔軟に再構成されてきたのである。

第五章では、文字メディアが朝倉の梯子獅子の起源伝承に与えた影響を検討した。聞き取り調査により、現在広く知られるイノシシ退治と豊年祭に関わる起源伝承は、大正時代から昭和初期に生まれた担い手には認識されていなかったが、昭和 30 年代以降の世代には定着していることが判明した。この世代間の認識差を出発点として、昭和 20 年代から昭和 50 年代までの自治体史、週刊誌、パンフレットなどの文字メディアを比較検証し、複数の伝承が一つに統一・固定化される過程を明らかにした。その結果、伝承の統一・固定化には、朝倉出身で知多市の文化財保護委員などを務めた山口喜一が執筆し、昭和 45 (1970) 年に知多市教育委員会が発行した文化財資料集が大きく影響したことが明らかとなった。文化財資料集は、自治体発行の冊子体という公的性格と、公立図書館の蔵書としてのアクセスの容易さにより、他の文字メディアよりも持続的な波及力と信頼を獲得した。さらに、こうした伝承変容の背景には、昭和 20 年代後期以降の外部からの注目（神宮での奉納、文化財指定など）に対する地域住民の主体的な応答があったことを指摘した。本章では、聞き取り調査と文字資料の検証の併用により、伝承の世代間の断絶や、文字メディアの影響力、地域住民の主体的関与を実証的に描き出すことができた。

第六章は、明治・大正期における牟山神社例祭日の変更と地域の生業変化の関係について、歴史資料や聞き取り調査を通じて実証的に解明した。第五章で確認したように、朝倉で現在流布している伝承では、牟山神社例祭は古くから秋に行なわれ、米や農作物の収穫を氏神に感謝する役割があると認識されている。しかし、牟山神社例祭は江戸時代後期には旧暦 8 月 8 日頃に斎行されていたが、大正元年に新暦 10 月 1 日へ、大正 9 年には 10 月 10 日へと変更された。現在のように例祭が 10 月に行なわれるようになったのは大正時代以降であった。この大正期の祭日変更の要因については、史資料と統計資料の分析により、養蚕業の繁忙期を避けるためであったことが判明した。この頃、朝倉では秋蚕や晩秋蚕の飼育量が増加し、それにともない生産リズムに変化が生じた。こうした産業の変化は、日常生活に影響を与えただけではなく、神社の祭りにも影響を及ぼし、祭りが養蚕の繁忙期と重ならないよう祭日に変更されたのである。

さらに、この祭日変更は例祭で奉納される梯子獅子の意味解釈にも変化を与え、新たな伝承が成立するきっかけを作ったことを指摘した。祭日の変更は、朝倉の人々が生活・生業を行ないつつも祭りを持続させるための工夫と評価できるが、結果として、祭りの奉納芸能である梯子獅子の再解釈にもつながっていったと考えられる。

第七章では、昭和 28 (1953) 年の神宮式年遷宮奉祝行事における朝倉の梯子獅子奉納と、その後の神宮古材拝領・御木曳行事が伝承組織や個々の担い手、地域に与えた影響を、聞き取り調査と朝倉集落に残されている歴史資料を分析することにより明らかにした。戦後初めて国民参加型の祭儀として執り行なわれた神宮式年遷宮において、全国から 49 組の民俗芸能団体が参加した奉祝行事に、朝倉の梯子獅子も参加した。この奉納を記念して神宮から古材を拝領し、それを用いた牟山神社拝殿の造営が行なわれた。これにより、従来は特別に

神宮とのつながりが強調されていなかった朝倉において、神宮との強い結びつきが形成され、神宮に対する一層の崇敬の念が芽生えていった。その後も 20 年に一度の継続的な奉納により、この関係性は更新され続けている。考察にあたっては、こうした一連の出来事が、当時の青年会長や一般の演者、住民、さらには後世代の演者など、それぞれの立場の人々がどのような受け止めをしたかを詳述し、世代による差異の傾向を明らかにした。特に昭和 20 年代から 30 年代生まれの世代では受け止め方に個人差が大きく見られたが、昭和 40 年代以降に生まれた世代では神宮での奉納を特別な機会として強く意識する傾向が示された。また、神宮での神事芸能としての奉納とその後の朝倉内での一連の行事は、単なる地域外イベントとは異なり信仰面にも影響を与え、次章で論じる担い手たちの神観念の変容の基盤となったことを論じた。

第八章では、担い手たちの信仰に関わる伝承の変化の実態を明らかにし、伝承が変容した背景や、伝承が変容しやすい環境、あるいは統一・固定化しやすい環境について考察した。大正末期から平成初期生まれまでの朝倉の梯子獅子の担い手約 60 名に聞き取りをした結果、牟山神社祭神に対する認識（祭神を女性と認識するか）や、梯子獅子演者となる条件（妻帯者は獅子演者となれるか）、櫓内への立入制限の対象範囲（男女ともに立入禁止か、女性だけが禁止か）について、世代による差異が見られることが明らかとなった。朝倉では女性に関わるケガレ意識の希薄化に伴い、祭礼での女性を避ける慣習や禁忌も無くなっていったが、新たな動機付け・再解釈（牟山神社の祭神を女性と認識すること）がなされ、慣習自体は継続されていると分析した。新たな神観念が生じた要因として、第七章で考察した神宮との関係構築や、近隣の大脇の梯子獅子の担い手との交流による影響が考えられると論じた。また、こうした伝承の変容を可能にした環境として、牟山神社に常駐する神職が不在である点を指摘した。

さらに、組織形態の変化が伝承を大きく変容させている点も明らかにした。かつての青年団では、会員の入れ替わりが頻繁で、個々の担い手の間に認識の差異、つまり、組織内部の多様性が存在した。しかし、青年会・同好会体制への移行により長期的に梯子獅子と関わる担い手が増加した結果、現在の担い手の間では極度に統一化されている。

第九章・第十章では、序章で提示したもう一つの課題である梯子獅子の上演のための舞台装置の意義について考察を行なった。

第九章では、日本列島の複数の梯子獅子伝承地における事例分析を通じて、担い手たちの梯子の扱い方や梯子に対する認識を検討し、梯子獅子における梯子の機能と信仰面での意義を明らかにした。全国の事例分析から、梯子は天上と地上を結ぶ境界的装置として認識される場合が複数確認された。また、神聖性を保つために塩を撒く、御幣や榊を梯子や櫓の上部に取り付ける、女性の接近を禁じるなどの習俗が確認された。加えて、演者には産穢を避ける、一定の年齢・出自条件を満たすなどの資格が求められ、梯子は資格確認の場としても機能していた。具体的には、熊本県六嘉神社や兵庫県伊勢の森神社では梯子の頂上から縁起物を落とす儀礼が行なわれ、梯子の上が神域とみなされていること、岩手県平組はしご虎舞

や愛知県朝倉の梯子獅子では、梯子が「天とつながる架け橋」、あるいは神の依る座へ接続する装置と認識されていることが明らかになった。さらに、能「石橋」や、沖繩久高島のイザイホーにおける七ツ橋渡りとの比較から、梯子が単なる移動手段ではなく資格の有無を確認する装置として機能していることを指摘した。

第十章では、梯子獅子の中でも梯子を支えるために作られる「ヤグラ」を用いる伝承地に着目し、担い手の具体的な行為や禁忌、担い手の語りから、ヤグラの信仰的意義を検討した。愛知県、和歌山県、徳島県の伝承地におけるヤグラの形状と装飾を概観したうえで、特に朝倉の梯子獅子の担い手たちの櫓の取扱い方法や禁忌などを詳細に検証した。その結果、朝倉では、組み立て前の柱・梯子を跨ぐことの禁止、柱・梯子を番茶で拭く行為、女性や妊婦の櫓への接近の禁止、櫓内部への侵入の禁止、中央の柱への御札と榼の取り付けなどの習俗が確認され、櫓が神聖性を付与された装置として扱われていることを明らかにした。さらに、日間賀島で昭和時代まで実施されていた正月行事「よいよい」や、南宮大社の蛇山神事など、獅子舞以外のヤグラを立てる神事にも触れ、儀礼空間におけるヤグラの重要性を指摘した。

終章は結論として、各章ごとの議論を要約したうえで、①朝倉の梯子獅子の変容の全体像、②伝承組織と「個」の関係性の動態、③梯子獅子における舞台装置の信仰的意義という三つの視点から総括を行ない、最後に今後の課題を提示してまとめとした。

以上の考察・検討を通じて、次の点が明らかとなった。

第一に、朝倉の梯子獅子の変容を多角的に考察した結果、朝倉の梯子獅子の変容は、以下の三つの連鎖による変容として理解できる。

- ①社会的変化（生業の変化、都市化、民俗芸能の外部からの注目）
- ②制度的変化（祭日変更、文化財指定、担い手組織の再編）
- ③認識の変化（伝承の統一・固定化、信仰意識の変容）

これらの変容は一方通行ではなく、相互に関連・影響し合いながら進行した。たとえば、養蚕業の興隆は祭日変更をもたらし、その祭日変更は、数十年の時を経て、梯子獅子の意味解釈の変化を促した。これらは、時代の変化に応じた柔軟な適応であり、変わり続けることで続いてきたと評価できる。

第二に、伝承組織と「個」の関係について、組織内部には集団として統一された面と、個々人で異なる面が併存していることを明らかにした。特に、組織形態の変容（青年団→青年会・同好会）により、かつては多様であった認識が、組織の再編後は極度に統一化された。

第三に、梯子・ヤグラは単なる道具ではなく、信仰的意義を持つ上演のための構築物であることを、担い手の実践から明らかにした。こうした棧敷論・ヤグラ論に関する研究は、折口信夫以来、林屋辰三郎や三隅治雄、服部幸雄などにより行なわれてきたが、従来は能・歌舞伎など限られた伝統芸能を対象にした考察が主流であり、民俗芸能の上演空間については十分に検討されてこなかった。本研究は、折口以来、議論が行なわれてきた棧敷論・ヤグラ論の研究を新たな視点から再考した研究であり、民俗芸能研究における空間論の深化に寄与するものである。